21 イラク

「サッカー国粋主義」と歓楽の都バグダード

酒井啓子

アラブ共通の「フットボール・フーリガン」

アラブ諸国どこでもそうであるが、男の子の最大の娯楽といえば、サッカーだろう。難しいルールもなく、高価な設備も必要でなく、ボール一個あればどこでも遊べるサッカーは、誰にでも取っつき易いスポーツである。御多分に漏れずアラブでもそうであって、高層ビルの間、建てかけの家の脇、砂漠や道端で子供たちがボールを追っている姿はよく見かける。

イラクの場合、国家レベルでサッカーに入れ込んでいるので、ますますその熱は上がる。スポーツや民族芸能を国家支援のもとに推進するのは、旧ソ連の文化政策を模したものであり、大規模な予算の国立競技場や文化センターが、一九七〇年代半ばから次々に建設された。

ちなみに、フセイン大統領の長男ウダイが大学卒業後最初についた公職は、「イラク・オリ

ンピック委員会会長」である。一時期、次男のクサイや、従兄弟のルワイ・アドナーン（当時のアドナーン・ハイラッラー国防相の息子）もこの委員会の幹部に座っていた。

こうしたムードのなかで、サッカー・チームが国外試合をするときは、大変な騒ぎである。一度イラクのサッカー・チームがシリアに国外遠征をしたことがあった。対イラン戦争の最中で、イランを支援していたシリアとの関係は最悪の状態のときである。イラク側の報道によれば、シリアでの試合は審判が皆シリアびいきで、数々の妨害と悪条件を強いられた。にもかかわらず、イラク・チームが勝利を収めた。

もうバグダードの街中が歓喜で大騒ぎである。勝利を祝ってあちこちで祝砲が鳴らされ、市民は自分の持っている銃を持ち出して路上で撃ちまくる。夜だったが街はさながら市街戦でもやっているかのように明るく、何も知らない外国人は、すわ、革命でも起こったか、と戦戦恐恐とした、とのことである。実際、流れ弾に当たって怪我をした人も、少なくなかったらしい。一九九三年秋のカタールでのワールドカップ予選大会ではイラクと宿敵イラン、サウディアラビアが出場したが、「負けて故郷の土を踏むな」と釘をさされたにもかかわらず、緒戦で逆転負けしたイラクの監督が突然更迭されたという、哀れな出来事すらあった。

政府と国民の期待を一身に背負っているだけあって、イラクのサッカー・チームは結構強いのだが、強い理由がもう一つある。対イラン戦争を行っているとき、大半の若者は兵役に行く

ことを恐れて学業を続けたり、いろいろな手段で兵役免除の道を模索したが、サッカーやバスケットボールのナショナル・チームの正メンバーになれば兵役を免除される、との規則があった。ちょっとでもスポーツに秀でた若者は、こぞってナショナル・チームのメンバーになりたがり、その結果レベルが格段に上がったのである。スポーツ選手になって「制度化された闘争」でお国に尽くすか、それとも本物の闘争で命を賭けるか、若者にとっては必死の思いだったろう。

FM放送が若者の娯楽

ところで、万国共通のサッカー熱のほかにイラクでは、イスラーム圏に珍しい派手な西欧的娯楽がある。酒とダンスと音楽。酒と恋の詩人、アブー・ヌワースの名から取った河沿いのアブー・ヌワース通りにはレストランと酒場が立ち並んでいるが、その歓楽の都を現代風・欧米風に再現しようとしているのが、現在のイラク政権である。

一九八〇年代のイラクには、「FMバグダード」というFM放送があった。午後四時頃から始まって、ずっと音楽、それも洋楽ばかりを夜十一時まで流している、という異色の放送局だ。一時間おきにニュースが数分入るが、すべて英、仏、独語などの外国語。DJももちろん英語で、「モナ、試験頑張ってね、アフマドより」なんていうリクエスト葉書のメッセージなども、英語で伝えられる。曜日によってジャズ、カントリー、クラシックと特集が組まれていたが、

基調は欧米のポップスである。

この「FMバグダード」の選曲が、イラクの都会の高校生、大学生の音楽的趣味を反映している、といっていいだろう。単調なアラブ音楽ばかりかかっているAM局や、全身金ラメの女性歌手がアラブ楽団を率いて歌い踊るテレビのショー番組よりは、ずっと若者に人気があるのだ。人気が集中していたのは、筆者が滞在していた八〇年代後半で、マドンナやマイケル・ジャクソンといったところ。欧米のヒットチャートをやや遅れて取り込んでいる、という感じだが、どちらかというとしっとりとしたロマンティックな雰囲気のある曲のほうが好まれる、というところは、「演歌」っぽいものの好きなアラブ人らしい好みだろう。

しかし、「先週のイギリスのトップテンは……」などというDJを聞いていて不思議に思ったことは、この輸入規制の強い、情報統制の強い国でいったいどうやって「最新」音楽情報を欧米から入れるのか、ということだった。街中の音楽テープ屋に行っても、十年は昔の洋楽テープが、悲惨な音質で売られている程度である。音楽テープ屋、といってもテープを売っているのではなくて、空テープを買ってマスターテープからダビングさせてもらう、要は「ダビング屋」さんなのだけれども。

不思議に思って何人かの友人に「FMバグダード」の実態について聞くと、どうやら放送局を始めたのは中・上流のいいとこのお坊っちゃまたちの自発的行動らしい。いいとこのお坊っ

バグダードのディスコ

ちゃまだから、一般国民が海外に行けないご時勢にあっても、親がイギリスに行ったり知人が湾岸に行ったりする。その機会にビデオやテープを仕入れてくる、というのが元手のようだ。

しかし、ラジオに限らず、あらゆる報道機関が情報省の完全独占であるイラク。お坊っちゃまたちのステータスはいったいどうなっているのだろう。このあたりは実態不明で、マドンナの曲などがかかると、よく友人と「よくまあこんな歌詞の曲、政府が放送を許すもんねぇ」とあきれたりもした。

政策としての「欧米志向」

管轄の問題はともかく、一九八〇年代当時政府がこうした「欧米文化志向」を推進していたことは、確かである。隣国イランとの戦争。そのイスラーム一色に染まったイランに向けてアメリカン・ポップスを流して、欧米文化にどっぷり浸かった「古き良き過去」を懐か

しませよう、というのが真面目な文化戦略としてとられていた。そして国内の「イスラーム過激派」に対する対策としては、「若者がラディカリズムに走るのは、情熱をもてあましているからだ。もっと娯楽を、もっとスポーツを」が、与党バアス党の「党大会」決定であった。

都市の一流ホテルは言うに及ばず、郊外に政府肝煎りで建設したリゾート施設にも必ずディスコがあって、家族そろって踊り明かす姿をよく目にしたものである。もともと踊るのが好きな国民性であるから、レストランでも親が子供をテーブルの上にあげて、幼児が料理の皿の横で腰を振って踊る姿は日常茶飯事であった。「鬼畜米英」の湾岸戦争を戦う国とは、とても思えない。

そういうお国柄であったから、バーやキャバレー、カジノはイスラーム諸国の中では名物だった。数えた人によれば、バグダードには七十数軒のキャバレーがあったらしい。

しかし、イランとの戦争遂行のために湾岸イスラーム国、特にサウジより援助を仰がねばならず、余りに「非イスラーム」的なのは困る、とのクレームが援助国からあったようだ。突然「風営法」が強化されて、キャバレーの閉店時間が早まったことがある。また外貨の仕送りが制限されて、キャバレーに雇われていたフィリピン人やタイ人が一斉に帰国したこともあって、一九八〇年代末にはキャバレーの営業もなかなか苦しくなっていった。

禁酒国からの上客

それにしても、一九九〇／九一年のクウェート侵攻／湾岸戦争に至るまでそうしたキャバレーやカジノの上客がサウジ人やクウェート人だったのは、なんとも皮肉である。彼らにしてみれば、イラクまでやってくるのはたかだか半日のドライブである。南部のバスラなどは、対イラン戦後、クウェート人の酒呑みの落とす金で景気回復したようなもので、週末はバスラのどのホテルもクウェート人で満員だった。カジノでダンボール箱一箱のドル札をすってしまったクウェート人が、カジノから早々に引き上げたかと思うと数分後にはドル入りダンボール箱をもう一箱抱えて戻ってきた、といった類の噂は枚挙に暇がない。週末のホテルのバーの料金が倍になっているので、何故かと支配人に聞くと、「客のほとんどがクウェート人なので、いくら料金を釣り上げても大丈夫」、との弁である。

彼らがキャバレーの踊り子に派手なチップをばらまくのも、飲酒運転で夜中の街をふっとばすのも、金のなくなったイラク人の反感を買わなかった、といえば嘘になる。

湾岸戦争後、こうしたキャバレーやディスコが生き延びているとは思えない。そういえば、対イランとの戦争中でも、戦闘が激しくなった時には「FMバグダード」の放送がすべてクラシックか、軍歌に一変していた。FMを流れる軍歌を聞いて、若者たちは、ああまた戦況が悪いのか、と理解したものだ。

一九八八年にイランとの戦争が終わって、もうFMから軍歌は流れないだろう、と思っただ

ろうに、湾岸戦争で再びの軍歌を彼らは聞いたことになる。湾岸戦争からはや三年、これ以上軍歌は勘弁だ、と考えているのか、また耳にすることを覚悟しているのか。享楽と熱狂の合間に戦争への不安が漂っている。

（さかい　けいこ／アジア経済研究所総合研究部）